

ドン・ジュアンに観るバイロン像 (11)

楠 本 哲 夫

To close the Labours of my day

バイロンの最初の、大きな、建造物である《Hours of Idleness》(解怠集)という、言うなれば廃墟となった僧院は 前号で述べた如く、亦、彼の最後の建造物でもあるのだ。

Why dost thou build the hall,
Son of the winged days?
Thou lookest from thy tower today:
yet a few years, and the blast of desert comes:
it howls in thy empty court.

何故に建立するや その館を汝

翼もて翔ける時代の児

汝 眺むる今 その塔から

だが数年にして、 砂漠に嵐は吹き

汝の廃屋の庭に吼ゆ

‘On Leaving Newstead Abbey’ (ニューステッドを去るにあたって) と前置きされた、あの、オシアン風の題銘は《Childe Harold》, the tales, the dramas, そして The comic masterpieces を通して 鳴り響いてくる。

それは—— 荒廃した僧院の中での最初のあのワインをなみなみとみたした <髑髏^{されこうべ}の杯> から オリンパスの山の '泥土の つまった髑髏^{されこうべ}へと さらに かつては 野望^{うっ}の、虚ろな館だった、あの、孤独の塔、そしてまた、英知と機知の陽気な後退へと転調する廃墟の中の荒廃の、あの形而上学的 響き、調べ なのである。そして さらに それから序々に Forum (古代ローマの集会場) と Flavian amphitheatre (古代ローマの円形劇場) の中の歴史の断片の中に立つ前進的 ruined poet (破滅の詩人) へと転調するのである。

その提示された 新様式は おどけたものから 悲劇的なものへと、さらに メロドラマティックなものへと、個人的なものから普遍的なものへと発展したが しかし そのテーマ、*panitas vanitatum* は不変のまま定着している。

もし 彼のグランドツアー前の時代の彼の original (原型的) な 具象の中で バイロンが Rabelais の Thelema又は Dashwood の Medmenhamの世界を改作することを求めたとしたら、劇の上演は ただちに興味を失ったであろう。Resselas の陰気な現実が moral balanceを 着せかえさせたであろう。Fay ce que vou dras が結局 それに準據できるモットーではなかった。

Newstead は バイロンにとって 重要なパラダイム (語形変化表、ここでは バイロンの 詩情、変遷の場所) となっている。何故なら ニューステッドは バイロン自身の基本的二律背反、自己矛盾 antinomies —— scared and profane (神聖にして不敬な), ascetic and self-indulgent (禁欲的にして自己耽溺の), solitary and social (孤独にして社交的) —— を要約しているから。

Newstead は 伝記的面では 一方においてバイロン自身の dynastie pretension (祖廟的自負), 他方において、family squabbles (家系のごたごた) を 祀^{まつ}った ところなのである。

ここで先ずバイロンは みずから貴族に生れたことへの、出生の誇りを感じ

ると同時に、社会的身分低き者への愛情が 自らの誇りの中へと潜行してゆくのを意識した。*

*Hours of Idleness (懈怠集) の中で 'to E——' に、
このことが詩はれている。

ここ、ニューステッドで バイロンは幼くして既に悟っていた。—— 即ち Mary Chaworth^{メアリー・チャウワース} なる女性のもつ雰囲気の中で、‘無視された恋の疼き^{うづ}’を、そして Mrs Byronの 毒樹の影の雰囲気の中で ‘医者のような、操作、調整術’を、そして バイロン自身の不具の足のもつ Oedipean curse (エディプス的 呪い —— 知らずして 父を殺し、母を妻とした Thebes 王。 のちに、このことを知り自ら両眼をえぐり 放浪する— の雰囲気の中で ‘無能力になった足を、そのまま、ちぐはぐに歩くことでの力強さを すでに悟っていた。 だから、

‘Tired with all these, for restful death I cry!’

(すべてに疲れ、憩いの死を求めて私は叫ぶ)

とバイロンが少年期に詩ったのは きわめて自然で ちっとも不思議ではない。

<死のテーマ> の出現は バイロンの少年期の詩を 彼の同時代の詩人たちのものと 明かに一線をわかし、特徴づけるものである。 Wordsworthは 少年期に中世風の恐怖を抱いたが一度もそれを印象づけることはしなかったし、Shelley は 虫けらや碑文をたのしんだが、それを強調した詩い方は、文字通り、おざなりなもの、流行的なもの、型破りのもの、にすぎなかった。

バイロンの死への願望は 核心から発生したものであり、故に、これから逃れることが Newstead,そして London, そして Venice におけるバイロンの 酒宴、馬鹿騒ぎ、底抜け騒ぎの、主な動機であり、又、彼のアラビア風の警句、聖書、Veniceの僧院における、平衡のとれた 没頭の、そして Levant

における厳しい、1810年の、全ての禁欲主義的寛大な原型の 主要な動機となっている。

バイロンが <死の願望> にとりつかれ、固執したという点では、彼は形而上学的詩人群に属し、そして後世の 'graveyard school' に属し、Beddoes、そしてHouseman、そして Powys に属するのである。そしてバイロンがとりつかれたものから創り出したものが、彼らが <生> への熱意 そして没入としての作品

発表に対する関係は 丁度、バイロンが 彼らの、取捨選択的、茶質鑑定人の如き立場にあるのだ と言ってよからう。

A sleep without dreams, after a rough day
Of toil, is what we covet most; and yet
How clay shrinks back from more quiescent clay! (XIV, iv)

夢なき眠り 荒っぽい苦役の一日の後の

それをとても私は あこがれる だが

^{つちくれ}土塊はなんと より無活動な土塊から

尻込みすることよ

この観察は <英国編> のなかばで 唄われているが Norman Abbey の賑やかな場面において 一種の punctum indifferens (冷淡、無関心な 斑点) を 構成している。そしてバイロンは 彼の dramatis personae を——Childe Harold 1, i-xiの old Medmenhamish crew, そして (もちろん、英国風に変装しての) 彼の Lala, Don Jose's, Gulbeyazes, Medras, Haidee, そして その他のものを含めて——全部 総集合させている。

旧式な 探偵物語の一つのように —— そこでは、すべての容疑者が、(たくましい、屈強な警視も 探え、待機して) 名探偵によって 最終的に罪

をばくろされようとして 罪の現場にすべての容疑者が再び集められているように、《ドン・ジュアン》も その最終的、結びの場面で 疑惑と未解決のパラダイム (型) を提示する。

このことは それ以前の 編との相違を特徴づけている、つまり、そこでは (それ以前の編では) Ines, Julia, Don Jose, Haidee, Lambro, Johnson, Souvaroff, Catherine, そして その他皆、彼らが巻き込まれたエピソードが そうであるように、あけっぱなしに描かれている。

勿論 エピソードが次々と流れゆく^{すがた}相は、予知できぬ、そして、未解決の要素は、すべて秀れた創作がそうである如く、そのまま、保持されていたが、Shakespeare 的 劇の偉大さを構成する諸の登場人物のもつ複雑性がないのをもの足りなく思う。

これら《Don Juan》の後篇において、Shakespeare の実存的流れへと変調してゆき Newstead と それを取巻く公園が 唯一の (Virginia Woolfe の Skye そして、James Joyce の Dublin は別として) 思いつくことのできる Lear 王の王宮と 枯れ果てた ヒースの原への相似物を形成している。

《Don Juan》は Lear 王が 進展するように、Mrs Ramsayが 自らを説明するように、Leopold Bloom が 彼の複雑な挫折と償いの策略をさらすように 流れゆく続篇の中、今まで描かれたことがない程、たしかに絢爛と、そして、たしかにぎっしりと、熱狂的事件をつめて、進み行こうとするのだろうか。

それを推し測るのはちょっと無理だ。だが しかし その徴候は うかがえないこともない。その過程は Canto XIIで ジュアンの心が a tougher rind (強じんな外皮) となりゆくことに始まる。彼の感受性が うすらぎゆくことに始まる (lxxxix)。そして Canto XIII を通して 彼の Lord Henry, Lady Adeline との接触が深まりゆき、彼ら及び—— 今、Norman Abbey へと

移されている—— 彼らの London の ‘world’ (世界) との親交が深まるにつれ 始るのである。English sense は 消極的な意味で彼に標的をしぼっている: つまり、彼は 俗人として発展するにつれ 同時に 一個の人間として 小さくされるのである。しかし ジュアンの基本的性格である 温かさ、自然性、そして善良性には ふれないままであり 彼の新しく発見した俗世間の知識とが 相互に作用しつつ より複雑な、より興味深い性格を醸し出してゆくのである。‘反対がなければ進歩はない’ Canto XIVまで ジュアンは本質的に 受身的、消極的であった。彼が行動したとき、その行動は彼に強制されたものだった—— 彼の longboat の中で、^{イスメール}Ismaelの攻囲戦で、Shorter Hillで。今、彼 ドン・ジュアンは はっきりと この物語の中で より積極的役割を果すことになりゆくのである。

《Don Juan》が 完結されていたなら、Canto XIV が たしかに 物語の中で かなめ であることは疑いの余地はない。この点で 主人公ジュアンは 支点的足の位置をとり、諸の大事件のふちで 周囲のなぐさみ者よりもむしろ、興味関心の人物となる。後続のすべてのことが 彼の囲りで 回転する。この Canto そのものが ‘great nature’ と ‘human soul’ の二つの深淵 (i, cii) の間で動いてゆく。これらの確認は Blake的であり、当然 我々は直ちに 我々を バイロンの生存の重大事へと真向うべく警報を発する。このことは あらゆる意味で 未解決の Cantoである: それはつまり、哲学的に、心理学的に、劇的に。我々は次の Cantoから 次の詩行を とり出すことができる。

‘Between two worlds Life hovers like a star’

二つの世界の間で 生は空を舞う、星の様に

即ち、それは 我々のモットーとして。

そして実に Canto XV の、この結びの節は Norman Abbey のエピソードの ‘hovering’ ^{モチーフ}motive (主題) の要約である。

バイロンは先ず 生命という意味深長なるものの中で 信仰と不信仰の間を舞う (XIV, 1-1iii)。このことから 人間の情況、条件へと 外挿法を用いながら、バイロンは 人間とは 無の世界の深淵をおおって懸^{かか}るものである——交互に魅せられつつ、又反撥しながら (iv-vi) ——としての相を示している。バイロンは 自分自身の相をかえりみて 詩とは、生の死の間をとぶ 紙^{かみ} 風^{だこ} なのだと のべており、又、自分自身の詩は、もっとも もろい玩具である、シャボン玉なのだと のべている (viii)。バイロンが、若き日と老いの日の間で 今、占めている、誰の所有でもない土地での 償いのジェスチュアを 次の詩はうたう。

In Youth I wrote because my mind was full,
And now because I feel it growing dull...
And what I write I cast upon the stream,
To swim or sink—I have had at least my dream. (XIV,x,xi)

若き日 詩をかいたのは 生気にみちていたから

今はだが 活気ないと感ずるから……

そして詩ったことばを 小川になげた

泳ぐため、沈むため——私は夢みてきた、少くとも。

さて、では、始めたときのよう、夢で結ぼう。Canto XIVは Norman Abbey の具象の中心的静止（血行停止、うっ血）なので、そこから Canto XIII, XV,そしてXVI がそれらの過去、未来の推定の中に抗りゆくのである。ここで ‘We return to the origin, and remain where we have always been’

（我々は 源へと帰りゆくのであるが、そして 我々が つねに そこにいたところで止りつづけるのである）夢、夢中遊泳が、最終編のいくつかに溢れる。表面には このプロットは ゆたかなコミックであり、サティリックな出

来事が展開される。それはバイロンが つねに はでやかに 展示する、まきちらす出来事なのである。即ち、この、'no-mans-land between heaven and earth' (天と地の間の 人のいぬ郷^{きと}) は 人間のコメディの舞台なのだ。だが 不断に——そして、これら 最後の Cantos においてほど 性急だったことは 決してなかったが——Byron は 我々の注意を、その底流にある原型的流れに向ける。かくも 多面体の異れる生を生きて (すべて矛盾にみちているが すべて誠実の)——現実と理想の二つの世界の間を '星のように 天空を舞いながら、Byron の詩人としての演出は奇術の域に達している。我々は Halits の Indian Jugglers (インド人奇術師) の世界に いるようだ。

あっと いうまに 四ケのボールを捕球して 又、一見意識的に その手に返すために投げ返すこと、それらを ある間隔でみずからの回りで、天球の遊星の如く廻轉させること、火花の如く お互に追いつくこと、あるいは百花、流星の如く shoot up (パッと咲かせ or 発射させる) すること、それらを陰で投げること そしてそれらを首のまわりで リボンや蛇のようにからませること、不可能にみえることをすること、しかも、Byron は これを やり遂げたのである。—— とても気楽に、優雅に、とても 無頓着に。

これは一つの表現のやり方なのだ、— 技術と沈着という点で。輝く、めくるめく、しかも 無為に。Norman Abbeyでは 一組のボールが 活動し続ける。Toobonaiでは もう一組のボールが、そして Missoloughiでは もう一組のボールが。双の手が 結局 そのきらきら光る火花を発する移り変りの効果を醸し出してゆく。我々はそのボールを何と呼ぼうか? 肉体と靈魂、火花と土塊^{つちくれ}、にんにくとサファイアと呼んだら?

そうだ、我々は 'Burnt Norton' という詩人と共に the final word 最後のことば を残しておくことができよう。

Garlic and sapphires in the mud
Clot the bedded axle-tree.
The trilling wire in the blood

Sings below inveterate scars
 Appeasing long forgotten wars.
 The dance along the artery
 The circulation of the lymph
 Are figured in the drift of stars
 Ascend to summer in the tree
 We move above the moving tree
 In light upon the figured leaf
 And hear upon the sodden floor

泥土の中のニンニクと サファイアは

^{すな}据えこまれた心棒を 凝結させる

皿の中で^{ふるえ}震る鋼鉄は

根深い傷跡で 唄い

久しく忘れられた戦を なだめる。

動脈に沿うての 踊り

リンパ液の循環が

漂いゆく星屑に形作られ

樹間で夏へと 昇りゆく。

我々は 動いている樹の上を動き

想像の葉の上の光の中を。

そしてきく びしょぬれの床の上で

下方で 獵犬と猪が

今まで通りの型を追うのを。

だが星群の間では和解して。

《Don.Juan》の詩は、Canterbury Talesのように、英語でかかれた詩の中で、その数篇の偉大な詩の中で、最も明快にして、最も近ずき易いものであり、決して、難解なものではない。Chaucerの描く Canterbury Tales * の如く 近ずき易く決して難解ではない。

だが Chaucerの如く《Don.Juan》は分析的に、analyticallyに これについて語るのは とても難しいのである。

このような詩は とても上手く、とても、明快に 語りかけるので、ただ端的に simply に 'その本を読みなさい' という以外には、これを どう説明したらよいか しばしば、わからなくなってしまうのである。

*Counterbery Tales <カウンタベリ物語>

Chaucerの代表作。主として heroic couplet からなる17000 余行の韻文と若干の散文とよりなる。晩年、10年間以上 (C.1837~1400) の執筆であるが、未完のまま となっている。

Caunteburyは 英国 Kent の小都会。国教会の総本山ともいうべき Counterbury Cathedralは 597年に St Augustine の創建、その後 変轉を経て 1495年、現在の形に完成された。1170年 ここで殉教の死を遂げた Thomas à becket の祠の巡礼の杖をひくもの、古くから絶えなかったが、奇蹟を生むと言われた その祠も 1538年 Henry VIII によって 破壊された。

このCanterbury の Thomas à becketの祠に詣でるために ロンドンの郊外 Southwork の旅亭 Tobard に落合った 29人の巡礼が、宿の主人の発案で、めいめい、往路に 2つ、帰路に 2つの物語りをして、旅の憂さを慰める というのが、その構想である。のちに、この Canon (聖堂参事会員) と その Yeoman (従者) が加わるので 巡礼の数は31になるが、実際に示されている物語りは Chaucer 自身が 2つ、他の22名が 1つずつ、計24となっており、目的地にも達しないところで終わっている。

Prologue は 全体の序詞で 巡礼各人の容姿、性格を 実に鮮かに描いた、絵巻き物にも比すべき 中世文学の圧巻である。

四月ともなれば 嬉しい小雨がしとしと

三月 乾きに 根まで 浸みとおり

その おしめり 葉脈のすみずみまで潤い^{うるお}
 効験 あらたか 花々 ほころび

という 有名な詠い出しで始まる、この物語り集の「序の歌」の中で「さまざまの人」を一堂に集結させる工夫をやって見せる。

イングランドの冬は長い。春四月ともなれば 堰^{せき}を切ったように 何かが起きる。恋も、冒険も。

それに 復活祭のシーズンでもある。年に一度の悔悛の秘跡をうける季節でもある。イングランドのあちこちから 巡礼者が胎動を始める。巡礼も償罪行為として 悔悛の秘跡の一環である。と同時に 当時、最早や信心に名を借りた慰安旅行でもあった。チョーサーは「私」と名乗るもう一人の自分を創作して、カンタベリー巡礼者に仕立てあげロンドン南郊のサザータなる陣羽織^{クバード}亭に 巡礼旅行の第一泊をさせる。そこに泊り合はせた客が31人。皆が巡礼者である。騎士、見習騎士、司祭、修道士、托鉢修道士、免償説教家、教会裁判所召喚吏、農夫、粉屋、荘園管理人、商人、船乗、各種職人家、コック、織女、医者、弁護士、地方郷土等々に至るまで勢ぞろいする。

チョーサーは 難しいことは言わない。絶対善と絶対悪との対立を地上で振りかざさない。無限のひろがりをもつ豊饒な中間点の どこにでも 自己を占位させる男である。

しかし 神の掌の中に その豊饒をおくときは 人間の行為はすべてに迂闊である。滑稽である。そういう意味で 「カンタベリー物語」の世界は 一種の喜劇である と言へるのではないだろうか。

しかし 《Don.Juan》 の重要性はヨーロッパ ロマンチズムの、最重要文献の一つであるのみならずまた、非常に多くのロマン的姿勢をうけついでいた我々にとって 《Don.Juan》 が 何故 そのように、重要な文学的源泉であり得るのかの、いくつかの説明を要求するように思える。こういうのも これまでの以前の 《Don.Juan》 についての 学者的、批判的文献が くだらぬ と申し述べる気持は毛頭なく、それどころか、全く 正反対の気持なのです。多くの批評家への、負うところは絶大で 誠に深いものがあるが、とりわけ、Steffan, Lovell, Korman, Ridenour, Joseph, Gleekner, Cooke, Hirsch, そして いつもながら、Leslie Merchand に負う所大だ。それにも不拘、これらすべての批評家及び他の批評家に 刺戟されてきたが、彼らが この詩に

ついて 明快な 一つの、分析的見透しを示すことはできなかった。

《Don.Juan》の満足的、知的処理、解明における、無能力にも不拘、数年前、たまたま その解明に着手した。High Romanticismへの学究的興味ゆえに、<<Don.Juan>>への、自意識の強い、理解という偏見によって 損われていたので、だが<<Don.Juan>>は 実は High Romanticism の critique 批評であり、かつ亦、apothesis 完全な例、真髄の双方なのである。

これらの研究から empirical経験による哲学への a general imension 総対的及び 《Don.Juan》の研究の基盤であるべき 2つの鍵となる発展がわき起った。

つまり、この作品が 創造的 且 分析的手段として 観られる場合の想像の性格（全般的に及び 特に Byron の双方の場合において）認識の分野としての、文脈の重要性と意味。

この二つの考が、非常に多くの Byronの生涯の全体及び全作品をすこしばかり変形された見透しとして投げかけ そして とにかく、これまで 考へて見なかったような やり方で 《Don.Juan》を再考することを、強いるのです。

この本 《Don.Juan》は ある脈絡の事実と考という点から 組織、組立てられているが、それは、その事実と考は、Byron が 詩人として最も有名である傑作の窮極の条件にとつてのみならず、人間バイロンにとって 重要であった。

これらの異なる文明が しばしば 《Don.Juan》そのものへの 明快な言及なくしてこの作品研究の過程を通して お互いの内外に織り込まれているので、もし、あらかじめ この書の組織、構成を支配する全般的計畫を提示し、整理し、発表すれば とても読書は 助かるだろう。そのような計畫は 1~3章を読むのに 特に役立つだろう。というのは それらの頁は 《Don.Juan》

そのものへの 2~3 の直接の関連、論及を含んでいるのだから。

最初の三章は 1817年迄の Byron 自身の生涯について はっきりとした背景の中で、(Don Juanを書いた、この詩人 Byronにとって 意義深い思想と性格的特性を示す) ある話題的背景を述べようと試みている。

B自身の性格の背景—— 己が生活をどう処理すべきかについて 矛盾的感情 ambivalence にみちみち、且つ、あらゆる点で 野心的でもあり 反動的でもある性格に支配された一人の人間—— が 周期的、頻発的 recurrently に 探究されている。

初めの部分 <early chapters> の章も亦、Byron の文学及び その中で、Byron 自身の立場についての 進展してゆく Byron の考えに影響を与えた、文学理論及び、その実践の背景を考究している。

この後者の篇の中で、(叙事詩、崇高なる詩、英雄詩体についての) 古典派的、新古典派的、ロマン派的考を、これから 直視するつもりであり、また、Byron が これらの考を 特別 使用し 或いは、その考に 特別に 反撥しているのを 直視してゆくつもりである。

これらの章の中で、たとへば Miltonの詩や、ロマンス物語りの詩のような、英雄詩体の伝統と Byron の関係、及び、彼自身の直接的、文学的背景と Byron との関係、及び、彼自身の時代の、詩論及び詩の実践と Byronとの関係をも考へてみるつもりである。

この研究の最初の部分は 第四章で 最高度に達する、即ち、ここで、《Don Juan》の、直接の、性格的、文学的、そして歴史的背景をとり扱う。

この章は 《Don Juan》 の中枢の部分であり、《Don Juan》が 検討されねばならぬという点から 最終的背景を展開する一方、それは亦、<一章より三章にわたり、繰返し検討されて来た> いくつかの、他の背景をも いっしょに 描き始めているから。

このときに当って なされた決定的ポイントは—— バイロン学者によって、これまで 気付かれていなかったのであるが—— Byron が あまり深慮なく《Don Juan》を 書き始めたこと、さらに、事実、書き始めたとき、彼には、長編詩、とりわけ、叙事詩をかく計画はなかった ということである。

1～4 章で 学ばれる、異れる、関連ある背景が《Don Juan》そのものが 5～8 章で 検討されるという点で、参考になる枠を提供している。第五章は、これまで 取扱われてきた、個人的、文学的、歴史的背景を考慮している。第六章は、この詩の形態の性格を分析するための、同じ、舞台装置に頼っている。

さらに この章は、引き続いて 背景を、この詩、自身の形式的形状、輪郭の中での、重大な要素そのものとして、想起させる。

第7章は それから更に続いて この詩の最終的意味の中での 説明的内容としての、この背景としての、この考へを検討し続ける。この章の中で、Byron の Miltonに対する関係という、流れ続けるテーマが その結論へもたらされる。

この最後のチャプターは、芸術家の想像力の意味と機能についての Byron の成熟した理解という点で、この書物が関連をもつ一連のデモンストレーションを合成、統合しようとする。《Don Juan》において Byron は神聖であり、勇敢であり、理想的である Miltonのすべてのものを のこしおく、それは人間的で、平凡であり、文脈上のものであるミルトンの中のすべてを バイロンは、後に残している。

2～4 章の中で、これらの章の始めで示された論理的範囲の中での議論を維持しようと努めてきた。この制限は展開する歴史的背景を出来る限り、あきらかにしておくために求められてきた。手続き上の選択は しかし 幾つかの 他の背景を取扱うことにおいて ある困難を醸し出している。即ち、この書が関係する知的な、文学的、幾つかの、他の背景を。たとへば 読者は、ある問題

は、—— Byron の生涯の中で extended history (影響力を及ぼされた歴史) をもつ問題は—— たとへば、Byron とMiltonの関係の如き—— 又、のちほど拾いあげられるべく、ときに放棄、一時中止されるのであるが この書の組織的構造についての、全般的叙述は、上述の如く、読者に彼 Byronが

これから移動してゆこうとしている地域の地図を提供する意図なのである。これを以て 彼 Byronは Wordsworth が、The Prelude の初めでの I can not miss my way” (ℓ 18) の文句のように、多少でも、そう望むのだから 彼は言い切るだろう。

2～4章で 話題的背景を厳密に、歴史的背景の述べられた年代記順の制限内に保つよう努めてきたけれども、三つの場合、この手続きを逸脱した。2章で Cain を論じた、もっとも、年代順的焦点は 1812——15 であるが。これをしたのは 他でもない、この劇が Byronの初期の '悪魔的' 物語りの重要性、意義を説明するに役立つからなのだ。

3章では Byronの劇 及び 物語りの形態を自叙伝的に使用したことについての論議を、1819に書かれた 《ダンテの予言》にも含ませてきた。

ある重要な分析を結論づけるために許可をとっているが、それを—— その分析—中断なく、いくつかの、後の篇で完結することは、容易でないだろう。

最後に4章は 1817～18年の重大な年月に焦点をあわせているが、この二つの章を使ったのは、この二つの章の限定的背景という点で 《Don Juan》 全体について、ある、幾つかの手始めの、評言をするためである。この研究を始めたとき “《Don Juan》 の最後の章と 叙事詩の規範” を包含するつもりであった。

この問題を取扱う興味、関心は、英国の叙事詩的伝統に関する Tillyard の如き 研究に 暗に含まれた、そして A.C.Bradley の有名な essay 《The long Poem in the age of Wordsworth》に 明白な、論議即ち 《Don Juan》 は 'Seriousness' (真面目さ) に欠ける故に、真の叙事詩と考へるべ

きではない という議論に 反対しようとの願いから 湧き起ったのである。

遂に決意したのだが、この章を削除しようと。その理由は、この問題は、結局、意味上、そして恐らく、哲学的、だが、博識ではないと思えたから。それにも 不拘、この問題に関する数語が 役立つと思う。

《Don Juan》が叙事詩であるか、そうでないか の問題は、本質的には、すべての長詩—— 事実、《Don Juan》そのものが明らかに そうであるように、第二次的叙事詩の伝統の中で、一つの地位を占めようとする—— に対する場合と同じである。（たとへば 1 cantos の 200 stanza を見よ）。

De rerum natura, the Dirina commendia そして The Prelude すらも 共通の同意によれば 叙事詩”である。しかし 正式の特徴において これらすべての作品は、純粹に考へられると 叙事詩とは はっきりとした離脱を示す。

詩を叙事詩とするものは 実際は一つには、叙事詩の明らかに現われる伝統に位置を占めんとする渴望であり、一つには、その渴望が成功したか どうかについての歴史への同意なのである。

叙事詩の規準は 換言すれば、絶えず 現れてくる。もし、なんらかの、特定の歴史的瞬間に、人が、ある肝要な叙事詩への規準を仮定して取上げるならば、それらの規準に合わぬ真の叙事詩が さらに 現れるだろう。事実は叙事詩のルールは 事実上—理論でなく—— 叙事詩の歴史の概観として 定義されることが すばやく 示すことだろう。

渴望によって、あるいは、同意によってのいずれかによるものであれ、新しい作品が、叙事詩の伝統に入ってくる度毎に“叙事詩の規準”は変更、手直しを経るのである。

Motamophoses, Doreturn natura,そして Dimina commediaが 叙事詩の伝統の一環である故 The Prelude, Don Juan, Pound's Cantos の如き作

品に対して 大きな道が開かれているのである。Lucan's Pharsalia が 叙事詩の万能性を確立し、それが 後世の作家に利用されるのであろう。英雄風を茶化した作品の伝統、—— 特に 18世紀の—— も亦、真の叙事詩に対して、ある可能性を創り出した、たとへば、《Don Juan》が それを示しているのだが。

かくて 《Don Juan》 が 叙事詩の傳統に入ってゆくことは 後世の詩に重要な、影響を及ぼした—— たとへば Cantos のように。The Waste Landは 叙事詩ではないが、その叙事詩への暗黙の態度は Pound's Cantos の暗黙の態度と共に、William's Patersonと David Jones's Anathemata を可能にする条件を創り出した。勿論 そのような叙事詩の伝統の外部の多くの要素も亦、出現する叙事詩の規準の性格に impinge する散文のロマンスが Orland furioso の如き詩に影響を及ぼしたのみならず 後年 Clarendon's History, Gibbon's Decline and Fall, そして Tolstoy's War and Peace の如き、散文叙事詩の可能性を考えること、を許したように思える。

これらの問題は epic 叙事詩としての、《Don Juan》の問題が 仮りの問題であることを説明する。

これが叙事詩であると考えられることを望んでいたし 又 歴史の合意が同意するから。

さらにこの歴史の合意は これが 《Don Juan》 —— それは 後の叙事詩の渴望に影響を及ぼした作品である —— の後に顕れる如く 叙事詩の伝統の中に かかっているからなのである。

The Prelude のように 《Don Juan》 は 後世の叙事詩への渴望者が規準と可能性を 渴望しうる、いや、渴望してきた詩なのである。

Bradley の Charge 非難 即ち、それは epic と呼ばれるほど 真剣なものでなく 《Don Juan》 に関する一つの判断でもなく、ある、理論的叙事詩的規準の弁護に過ぎぬ。人は勿論、《Don Juan》の真剣さを容易に弁護する

ことはできるが、そのような運動は、もし《Don Juan》を叙事詩としてのみ扱うつもりならば 全く不必要であろう。

《Don Juan》は 真剣な詩である。しかし この叙事詩の歴史の中での特別の登場人物は それが その真剣さが ほとんど完全に、喜劇的 そして諷刺的形態の根拠の下に定義されているという伝統の中で最初の詩であるということなのである。

この書の中での最大の知的恩義は Jay Scheusener に対してである。つまり、彼が Ordinary Language Philosophy へと 紹介し 導いてくれたし、そして 又、しばしば Richard Striel (もう一人の同僚)と共に《Don Juan》そのものについての 多くの特別の議論のみならず、ここに作用している考の多くを論じた Jay Scheusener に対してである。

《Don Juan》が、それらの 双方がなければ 書かれなかったであろうというのは、最も単純な事実であろう。

—— 続次号 ——

参 考 文 献

- 1) Elizabeth Longford, Byron:Hutchson.
- 2) Ernest Hartley Coleridge. The Poetical Works of Lord Byron: Lewis Prints.
- 3) Leslie A.MArchand, Byron's Poetry:John Murray.
- 4) Bernard Blackstone, Byron:Longman.
- 5) John D.Jump, Byron:Routledge & Kegan Paul.